

從北海道膽振地方厚真町の發掘成果所見古代～近世愛努史

北海道胆振地方厚真町の發掘成果からみた古代～近世アイヌ史

Viewing Aynu's Ancient and Early Modern Periods through the Achievements of Archaeological Excavation in Atsuma-chō, Iburi Subprefecture, Hokkaido

文・圖 | 蓑島榮紀 MINOSHIMA Hideki
(北海道大學愛努・先住民研究中心准教授)

譯者 | 陳由璋 (政治大學民族學系博士生、日本北海道大學愛努・先住民學講座博士生)

文責・圖 | 蓑島榮紀 MINOSHIMA Hideki
(北海道大學アイヌ・先住民研究センター 准教授)

訳者 | 陳由璋 (政治大學民族學系博士課程、北海道大學アイヌ・先住民學講座博士後期課程)



2013年から始まった「イランカラプテ」キャンペーンのロゴマーク。アイヌ語とアイヌ文様を組み合わせたデザインを使用し、アイヌ語の「こんにちは」で北海道の特色を押し出している。(出典:「イランカラプテ」キャンペーン推進協議会 <http://www.irankarapete.com/>)

2013年迄今產官學合作舉辦的irankarapete活動標誌。設計概念結合了愛努語與愛努紋樣。以愛努語的您好打造北海道的當地特色。(圖片來源:「イランカラプテ」キャンペーン推進協議會 <http://www.irankarapete.com/>)

厚真町は、北海道の太平洋側、胆振地方の東部に位置する。新千歳空港から自動車約30～40分。人口約4600人で、米やハスカップなどの生産で知られる農業の町である。東隣には、アイヌ文化の伝承地のなかでも著名なむかわ町や平取町などがある。

厚真町と松浦武四郎

幕末に蝦夷地を旅し、膨大な記録を残した松浦武四郎は、厚真にも足跡を残している。安政5年(1858)6月21日未明、馬で勇払会所(現苫小牧市)を出発した武四郎は、厚真川河口から流域に入り、23日まで厚真に滞在した(『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』)。

厚真町位於北海道的太平洋沿岸、膽振地方の東部。從新千歳機場開車約為30到40分鐘。人口約4600人、以生產稻米、藍靛果等而知名的農業之鎮。東鄰之處，亦是愛努文化傳承地中著名的鶴川町與平取町。

厚真町與松浦武四郎

幕末時期松浦武四郎行旅蝦夷地，留下大量的紀錄，也在厚真留下足跡。安政5年(1858)6月21日天色微明，武四郎從勇払会所(現今苫小牧市)騎馬出發，從厚真川河口進入流域，停留厚真到23日(《戊午東西

21日、22日の両日、武四郎は厚真川中流域のトンニカ・コタン(現厚真町富里地区)に宿を求め、当地のアイヌ社会の「乙名」(和人がアイヌの有力者を任命した役職)である板蔵の家に泊まった。その屋内には「行器」(シントコ。和人から入手される大型の漆器で、アイヌ民族が財宝・儀礼具として珍重した)が「三十モ有リ」、また「蝦夷太刀」(アイヌの儀礼刀)が「二十五六振」も懸けられるなど、板蔵の保有する「宝」の多さに武四郎は目を見張っている。

22日、武四郎は厚真川の上流域に足を延ばし、現地踏査やアイヌ民族からの聞き取りによって、上流域各所の地名や様子を見聞した。このとき武四郎は、「カニシユウ」という少し珍しい地名について記録している。「カニシユウ」はアイヌ語の「カニ・ス」で、「鉄鍋」の意味である。現在の幌内地区一里沢に相当すると考えられる。

武四郎は、「ここには昔、ひとつの鍋があったのでこの地名が付いた。この鍋は昔どこの誰が置いたのかわからない。一説に300年前のものという話もあるが、今はもう鍋は朽ちて失われ、ただここにあったという場所だけが残っていて、そこにアイヌ民族がイナウを立てて祀っている」と説明し、3つの穴のある吊耳鉄鍋の図を付している。この伝承からは、厚真川上流域が、古くから祭祀や流通の面で重要な場所として認識されていたことをうかがうことができる。

23日、武四郎は宿泊地のトンニカを発ち、厚真町東部の沢をたどって隣の鶴川流域へ移動する。このルートの周辺には、アイヌ語で「道」を意味する「ル」の付く地名が多く記録されている。当時、厚真町やその付近は、アイヌ民族によ

蝦夷山川地理取調日誌)。

21日、22日両日、武四郎は厚真川中流域のトンニカ・コタン¹(tonika kotan)(現今厚真町富里地区)尋找投宿、留宿於當地愛努社會的「乙名」(和人任命愛努有權勢者的公職)木板倉庫的家裡，武四郎看到屋內的「行器」(シントコ/sintoko，從和人所取得大型的漆器，愛努民族則作為財寶、儀禮器具視如珍寶)數量「竟有三十」，另外，懸掛著的「蝦夷太刀」(愛努的儀禮用刀)也有「二十五六把」等，對木板房中所有的大量「寶物」感到瞠目結舌。

22日，武四郎將步伐延伸到厚真川的上流流域，透過現地踏査與向愛努民族打聽，聽聞了上流流域各所的地名與様子。此時，武四郎記錄下「カニシユウ」(kanisyuu)這個稍微特別的地名。「カニシユウ」(kanisyuu)是愛努語的「カニ・ス」(kani su)，是「鐵鍋」的意思。可推想相當於現在幌內地區一里澤。

武四郎說明「在這裡以前，因為曾有一個鍋子所以才取這個地名。這個鍋子以前不知道是哪裡的人放在這裡。一種說法是已是300年前的故事了，但今日鍋子已經腐壞遺失，只留下鍋子曾存在過的場所，因此愛努

◎譯者註

1. コタン為愛努語的部落之意。

る内陸交通ネットワークの結節点のひとつだったのであろう。武四郎が、アイヌ民族の知識に大きく助けられて旅をしたことは、こうした点にもうかがわれる。

厚真川中流域の遺跡

21世紀に入って以来、厚真町では、上流域の厚幌ダム建設などを理由とする発掘調査が相次いだ。その結果、アイヌ民族の歴史を考えるうえできわめて重要な成果が数多く得られている。

武四郎が宿泊した中流域のトンニカ付近（富里地区）には、ニタツナイ遺跡がある。同遺跡では、17世紀後半のチセ跡が複数検出され、シャクシャインの戦い（1669年）と同時期のコタンの存在が確認された。また、数多くの金属製品を出土し、とくに日本国内で2例目となる銅製銚子の出土は脚光を浴びた。東京都港区汐留遺跡の大名屋敷跡（脇坂家）に類例があり、日本社会の富裕層に酒器として使われるものであった。年代は200年近く違うが、武四郎を驚かせた幕末のトンニカ・コタンにおける財の豊富さを連想させるような発掘成果である。また、発掘区の東側では、25頭分のシカの頭蓋骨が集中して見つかり、とくにオスの頭骨が4体分重ねられた状態で出土した。近世のアイヌ民族によるシカ儀礼の痕跡として大きな注目を集めている。シカ皮やシカ角などの交易品生産ともかかわるであろう。

なお同遺跡では、11世紀頃の鉄鏃の出土も話題となった。断面がZ字状となる独自の形態で、日本国内には類例がなく、アムール川中流域のナデジンスコエ遺跡出土の鉄鏃（パクロフカ文化期）に似ると指摘されている。このことは、古代アイ

民族在此擺設「イナウ（inaw）² 祭祀」²，並附上有三個洞的吊耳鐵鍋圖。從這個傳說可以來窺知，厚真川上流流域，是從古以來於祭祀與流通層面被理解為重要場所。

23日、武四郎從投宿地トンニカ（tonika）出發，抵達厚真町東部の湖澤後，移動到鄰近的鵠川流域。他在此路線的周邊，記錄下許多附有有意為「道路」的「ル」（ru）的愛努語地名。當時，厚真町與其附近，應該是愛努民族內陸交通網路連接節點之一。武四郎他之所以能如此受到愛努民族的知識大力相助，也跟這一點有所關聯。

厚真川中流域的遺跡

邁入21世紀以來，厚真町因上流流域建設厚幌水壩等理由，陸續進行發掘調查。其調查結果，則是獲得許多在思考愛努民族歷史上極為重要的成果。

在武四郎所投宿的中流流域トンニカ（tonika）附近（富里地區），有ニタツナイ遺跡（Nitappunai）。在同遺跡內，檢測出複數的17世紀後半チセ（cise）³ 遺跡，確認有與シャクシャイン⁴之戰（1669年）同

◎譯者註

1. イナウ（inaw）為愛努語，是用木條削出帶有流蘇形狀的祭品。
2. チセ（cise）為愛努語，為家屋、屋舍之意。
3. シャクシャインsaksaynu 是江戶時代的愛努首領，位於今日的靜内地區。



ニタツナイ遺跡出土の近世の銅製銚子（日本国内で2例目の出土例）。Nitappunai遺跡所出土の近世銅製銚子（日本国内第2次出土例）。



ニタツナイ遺跡出土の近世のシカ儀禮跡（シカの頭蓋骨25体分が集中して出土）。Nitappunai遺跡所出土の近世祭儀禮遺跡（出土時聚集了鹿の頭蓋骨25隻）。

ヌ（私は、「擦文文化期」をアイヌの歴史における「古代」と考えることを提案している。『原教界』81号参照）と、ユーラシア大陸極東の女真や五国部との交流を示す可能性がある。厚真は、古代から大陸や本州ともつながりを有する交流の要衝だったのである。

厚真川上流域の遺跡

厚真川上流域、武四郎が「カニシユウ」の伝承を記録した地点の周辺（幌内地区）でも、多くの重要な遺跡が発見されている。

ヲチャラセナイチャシ跡は、丘の先端に壕を

時期的コタン（kotan）存在。另外，出土許多金屬製品，特別是日本國內第二次出土銅製銚子⁵這件事受到矚目。東京都港区汐留遺跡の大名屋敷跡（脇坂家）裡有類似案例，這是日本社會富裕階層中曾使用過的酒器。年代雖有200年左右的差距，但此發掘成果是讓人聯想到武四郎所驚訝的幕末トンニカ・コタン（tonika kotan）中的豐富財寶。另外，發掘區的東側，發現有25隻鹿的頭蓋骨集中在一起，特別是有四隻雄鹿的頭骨出土時是重疊狀態。在此所發現的近世愛努民族祭儀禮跡受到相當大的關注。可能也跟生產鹿皮與鹿角等交易品有關連。

此外，在同一遺跡，出土了11世紀左右的鐵製箭頭也成為話題。断面成Z字形的獨自型態，在日本國內則沒有類似案例，所以被認為是跟黑龍江中流域的ナデジンスコエ遺跡（nadejinskoe/надеждинское）（女真文化期）出土的鐵製箭頭相似。這顯示出古代愛努（我有提案將「擦文文化期」思考為愛努歷史中的「古代」，請參考《原教界》第81期）可能跟歐亞大陸極東的女真與五國部有過交流。厚真，從古代則曾是與大陸與本州交流連結的要衝之地。

◎譯者註

5. 銚子為用來倒酒的酒器。



ヲチャラセナイチャシ近景（厚幌ダムの建設により現在は湖底に沈んだ）。
Wocharasenaicasi遺跡近景（因厚幌水壩建設目前沉入湖底）。

めぐらせた「チャシ」（アイヌの砦あるいは聖域など、さまざまな機能を有する構築物）である。AMS法（放射性炭素年代測定）による出土遺物の分析結果から、13世紀に構築された可能性が高いと考えられている。現状で北海道最古のチャシであり、チャシの起源が擦文時代に限りなく近づくことを明らかにした点でも重要である。

このチャシに近接する上幌内モイ遺跡では、11世紀頃の儀礼場と考えられる地点が見つまっている。そこでは、炭化したイナキビやイナキビの団子が出土し、現在につながるアイヌ民族のカムイノミ

厚真川上流流域的遺跡

厚真川上流流域・也在武四郎記録下「カニシユウ」（kanisyuu）傳承的地點周邊（幌内地區），發現許多重要的遺跡。

ヲチャラセナイチャシ⁶（Wocharasenaicasi）遺跡，是山丘的頂端有壕溝圍繞的「チャシ

◎譯者註

6. チャシ（casi）為愛努語，為山寨、城寨之意。



上幌内モイ遺跡出土の11世紀前後の銅碗（被熱して変形している）。
上幌内Moi遺址出土の11世紀前後の銅碗（因受熱變形）。

（神々に祈りを捧げる儀礼）との共通性もうかがわれる。また、青森県五所川原産の須恵器（窯を使用して焼成された本州の陶質土器）など、本州産を含む多量の土器や鉄製品が発見されており、4点の青銅製の碗も出土した。銅碗は、本州では仏具などとして用いられたが、同遺跡の銅碗は被熱して破壊されており、本州とは異なる独自の文化体系のもとで受容されていたことを推測させる。

この上幌内モイ遺跡や、付近のオニキシベ4遺跡など、厚真川上流流域の發掘成果が明らかにしたもう一つの重要な事実は、「擦文文化」後期の遺構・遺物（12世紀頃の住居跡など）と、初期の「アイヌ文化」とされる遺構・遺物（13世紀頃のチセ跡など）との共通性がいくつも見いだされ、また、両者がほとんど断絶なく連続的に確認された点である。従来、「擦文文化期」から「アイヌ文化期」への移行過程については、具体的な情報が乏しかった。それゆえ、両者が連続することを示した厚真町の發掘成果は、「擦文文化期」を

（casi）」（是具有愛努的要塞或是聖域等各種機能的建築物）。從透過AMS法（放射性碳定年法）分析出古遺物的結果來看，被認為是很有可能是在13世紀時所建蓋的。目前是北海道最古老的チャシ（casi），チャシ（casi）の起源是極為接近擦文時代這點也很重要。

接近這個チャシ（casi）的是上幌内Moi遺跡内，發現被認為是11世紀左右的儀禮場所的地點。在這裡，出土了炭化的稻黍與稻黍丸子，也可以窺視出連結到現代愛努民族的kamuy nomi（向眾神祈禱的儀式）之共通性。另外，發現青森縣五所川原生產惠器（使用烤窯燒成的本州陶質土器）等，包含本州生產的大量土器與鐵製品，也出土了4件青銅製的銅碗。銅碗，在本州是當作佛教器物使用，但該遺跡的銅碗受熱被破壞，可推測是與本州相異的獨自文化體系之下受容使用。

使上幌内Moi遺跡與附近的オニキシベ4遺跡（Onikisibe）等厚真川上流流域的發掘成果的明確的另一個重要的事實是，可看到「擦文文化」後期的遺址、遺物（12世紀左右的居住遺跡等）與被視為初期的「愛努文化」的遺址、遺物（13世紀左右的CISE遺跡等）之間有多個共同性。另外，是可以確認出兩者幾乎沒有斷裂具有連續性這點。以往，關於從「擦文文化期」往「愛努文化期」的移轉過程，是缺乏具體性的資訊。因此，厚真町の發掘成果可以證明兩者之間為



厚真川上流域での發掘調査にともなうアイヌ民族の儀式。
與厚真川上流域中の發掘調査一起進行的愛努民族儀式。



地震で被害を受けた埋蔵文化財（旧鹿沼小学校体育館。出土遺物の保管場所として使用されていた）。
因地震受災的埋蔵文化資產（舊鹿沼小學校體育館。之前被作為出土遺物的保管場所使用）。

「アイヌ史」の一部としてとらえるうえで、きわめて大きな意義を有するといえる。

また、この地域では、オニキシベ2遺跡や上幌内2遺跡など、多数の中世（14世紀前後）のアイヌ民族の墓も見つかっている。これらの発掘調査を契機として、厚真川上流域では、例年、厚真町および近隣のアイヌ協会による祖先供養の儀式がおこなわれている。

厚真町の被災と文化財

2018年9月6日、北海道を大きな地震が襲い、震源となった厚真町は最大震度7を記録した。この地震によって、厚真町では大規模な土砂災害が発生し、町内だけで36人の人命が失われた。復興はまだ緒についたばかりであり、厚真町や近隣では、今も多くの住民が仮設住宅での生活を余儀なくされている。

この地震では、文化財も大きな被害を受け

連続的情况，這對將「擦文文化期」視為「愛努史」の一部份這件事上，可說是具有極為重大的意義。

另外，在這個地區內，也發現了オニキシベ2遺跡（Onikisibe）與上幌内2遺跡等多數中世（14世紀前後）愛努民族的墳墓。以這些發掘調查為契機，厚真川上流流域內，每年慣例由厚真町及鄰近的愛努爺會進行供養祖先的儀式。

厚真町の受災與文化財

2018年9月6日，北海道受到大地震襲擊，震源的厚真町觀測到最大震度7級。因為這場地震，厚真町發生了大規模地土石災害，光町內就有36人不幸罹難。復興之路才剛起步，在厚真町與鄰近之內，現今仍有許多居民被迫居住生活在臨時住宅之中。

た。災害にどのように立ち向かっていくかは、2011年3月の東日本大震災以後、日本でも文化財学における重要な課題となっている。今回の地震における被害の大きさに直面し、復興への道りを思うとき、歴史学や考古学、文化財にできることはわずかであるとも思われる。しかし、今回紹介したのは、厚真町の発掘成果のほんの一部に過ぎない。この小文を通じて、厚真町の発掘成果が、アイヌ民族の歴史を考えるうえできわめて重要であることを、北海道やアイヌ民族に関心をもつ多くの台湾の方々にも知っていただければ幸いです。◆

（小文で紹介した出土遺物は、2019年6月現在、厚真町軽舞遺跡調査整理事務所で見学することができる。）

因這場地震，文化財也受到很大的災害。該如何面對災害這件事，在2011年3月東日本大地震之後，在日本也成為文化財學之中的重要課題。在面對這次地震之中所造成的嚴重受災，思考走向復興之路時，歷史學與考古學能為文化資產做的事也被認為非常有限。但是，本次介紹的內容，其實只不過厚真町の發掘成果的一小部分而已。透過拙作，希望有幸能讓台灣的各位讀者們，也能了解到厚真町の發掘成果，對於在思考愛努民族歷史時是極為重要的事。◆

（拙作所介紹的出土遺物，於現在2019年6月，可在厚真町輕舞遺跡調查整理事務所參觀）。

作者簡介 | プロフィール

襄島榮紀 (MINOSHIMA Hideki)

北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授

1972年横浜市生まれ。2000年、國學院大學大学院文学研究科日本史学専攻博士後期課程修了。博士（歴史学）取得。苫小牧駒澤大学への勤務を経て、2014年4月より現職。専門分野は日本・北東アジア古代史、北方地域の交流史、アイヌ史。著書に『古代国家と北方世界』（吉川弘文館、2001年）、『「もの」と交易の古代北方史—奈良・平安日本と北海道・アイヌ』（勉誠出版、2015年）。主要論文に「古代北海道地域論」（李成市ほか編『岩波講座日本歴史20 テーマ巻1 地域論』岩波書店、2014年）、「7世紀の倭・日本における「肅慎」認識とその背景」（小口雅史編『古代国家と北方世界』同成社、2017年）などがある。



襄島榮紀 (MINOSHIMA Hideki)

北海道大学愛努・先住民研究センター准教授

1972年横浜市出生。2000年、國學院大學大学院文学研究科日本史学専攻博士後期課程修了。取得博士（歴史学）。曾任職於苫小牧駒澤大学，2014年4月開始就任現職。專業領域為日本東北亞古代史、北方地區的交流史、愛努史。著作有《古代國家與北方世界》（吉川弘文館、2001年）、《「物」與交易的古代北方史 奈良平安日本與北海道・愛努》（勉誠出版、2015年）。主要論文有〈古代北海道地區論〉（李成市等編《岩波講座日本歴史20 主題卷1 地區論》岩波書店、2014年）、〈7世紀的倭 日本內的「肅慎」認識與其背景〉（小口雅史編《古代國家與北方世界》同成社、2017年）等。